

「火」を取り入れる暮らしのデザインを

植田 実 *Interview with Makoto Uyeda*

人は「火」を見つめながら生きてきた

住まいも近代化が急速に進み、現代住宅で、火がある「場所」と言えば、もう暖炉ぐらいいしありません。それだけに、燃える火を中心に住まいを考えることは、結論を先に言うてしまうと、今はとても難しいんじゃないでしょうか。

日本の国民性もあるのですが、危険と思われるものは何でも、家の中から排除していく方向に進んでいるため、ますます私たちの生活から「火」は遠ざかっています。

私は昭和の初めの頃の生まれですが子どもの頃を思い返してみ

ると、よく火を見ていた記憶があります。

一つは、ロウソクをつける行為をとおして。当時はもちろん、電灯の時代になっていて、ガス灯でさえも家庭では、あまり見かけなかったわけですから、明かりとしてロウソクも必要なかったはずですが、ロウソクを点す何らかの機会は、いろいろな場面であったと思いますが、ロウソクの揺れる火をよく見ていた記憶はあります。子どもの頃は、火を見るということは、幻想的なイメージを湧かせ、いつまでも見ていて飽きがおこなったのでしよう。

もう一つは、子どもの頃に住んでいた家にあつたガスストーブの火の記憶です。世田谷区の下北沢にあつたその家は、戦争の空襲でなくなりましたが、昭和初期の新興住宅によくある、全体は和風、玄関の横に一部屋だけ洋風の応接間、という間取りでした。その部屋にガスストーブが置いてあり、その罫子の間に青い火がチロチロと燃えているのが、「火」による一種の舞台のように思えて、いつまでも



1本のロウソクの光を、ビーチパラソルと白い丸テーブルが2人だけの場所に変える。その50もの光が連なって波打際のラインを見せている。韓国・釜山で

見続けていました。あの火はひたすら美しく、危ない感じはしませんでした。自分の体験から言って、子どもの時代に、ああいう火を見る生活をするかしないかによって、その後の精神に与える影響は、だいぶ違うような気がします。それが今の住宅にはなくなってしまうているんですね。

ちなみに練馬

区にある現在の私の家では、三五年ぐらい薪ストーブを使っています。鉄板製の、北国ではよく使われているタイプのもので、高くても八〇〇〇円くらいです。北国のほうではガンガン使うので、だいたい一年間に一個は潰すようで、毎年買い換えていると聞いています。しかし我が家は、それほど頻度で使用するわけではありません。で、もう少し長持ちして、今は三代目です。新しいのをまた昨年暮れに買いました。

我が家の居間の暖房はこのストーブだけです。天井も張っていない十何畳がある部屋は、ほとんどこれ一つでまかっています。燃料の薪は、大工さんが毎年冬になると木の端材を運んで来てくれます。それから少し近所のゴミの収集所で枝などをまとめて捨てているものを買ってきたりもしています。

少し前までは、子どもと散歩に行くとき、松ぼっくりなどを山ほ

ど拾ってきて燃料としていました。現代の都市環境でも、そのつもりで見渡せば、燃やせるものは日常生活の中に結構あります。今は東京には、松ぼっくりなんかを珍しがって見るような人はいないと思うのですが、薪ストーブを使って見ると、まだ、いくらでもあります。家の中から火がなくなってしまうのと同時に、そういう見方や感じ方も捨てられてしまい、それと同時に、大切な何かも忘れられてしまったような気がします。

家の中に火を入れようとした時、それなりにリスクもきつとあるはずですが、身近に火を置いておきたいという気持ちは、人間の本能としてあるはず。

「火」を見ているだけでは
本当の付き合いではない

例えば、ストーブで燃えて灰になったものを、今度はいろりの床に戻したり、庭に埋めて活用したりしますが、火を使うことで、そういう形で色々なものが循環できます。最近、別荘などで薪ストーブが流行しているのは、昔ながらの一般に使われている薪ストーブや石油ストーブとは別に、建築家が設計した「コンバクトな鑄鉄製のお洒落な薪ストーブ」が作られるようになってきたこともあると思います。そういう生活は、私の言う循環とは、別の次元の話なのかもしれません。しかし、都内の一戸建て住宅でも庭が少し広いとなると、薪ストーブを置くことも多くなっているようです。やはり火を、どこかで求めているのでしょう。

求めているけれども、薪を焚いて燃える火を見て楽しんでいるだけでは、やはり本当の火との付き合いではない。薪をどこから買ってくるのかを考えるだけでは……。

薪を買うだけでなく、やはり火を中心とする全体の循環的な環境に関わる形にならないといけません。燃えた後の灰をゴミに出

すのではなくてね。ずっと火を見ている間だけが、火との付き合いではなく、火から発生する色々な手仕事を含めた全てが火との付き合いになる。泥とか土とか、炭とか灰とか。そういったものが、本当は火から発生する大切な生活の仕組みになっているはずですよ。

一九五〇年代後半から六〇年代に入った頃ぐらいには、著名な建築家の住宅に、ぼちぼち暖炉が登場してくるようになりまして。有名なものには、清家清さんが設計した『続・私の家』という、二番目の自宅を作られた時に、広い居間に暖炉を作られた例がある。吉村順三さんの設計された住宅にも優れた暖炉が多いのは、よく知られています。そう考えると、もう四〇年以上、戦後の住宅で暖炉を楽しんできた経過があり、その一方で、ガスとか電気という形で熱源は、だんだん目に見えないところに行ってしまうのではないのでしょうか。

そういった意味では、六〇年代以降の石油の普及がすごく大きなポイントになったと思います。石油ストーブが売り出され、我が家も当時は、グッドデザインとしてよく知られた「ブルーフレーム」を使っています。石油ストーブだから、あるいはガスの



薪ストーブ、石油ストーブ「ブルーフレーム」、こたつが揃い踏みだった頃のわが家の広間。薪ストーブが中央にあると、畳が部屋を縁取るかたちになるのも自然の成り行き

青い炎が燃えるストーブが随分親しまれた頃が確かにありました。ただその後、倒れたらすぐ消えるような装置がついたり、安全を訴えるようになったりしたのと併行して、家の中から火はなくなる方向に向かっていきました。

そしてやがて、エアコンなどの冷暖房が本格的になり、結局暖房に関してはストーブなどとは違う方向へ進んでしまいました。だから火であたたまるというスタイルが残った家は数えるほどしかなくなりました。火は一つの趣味と言っか、そういう楽しみになつてしまつた。

ただし、目で見る楽しみとしての火の価値は、今の住宅でも、決して細々としてではなく、けっこう流行っています。大きく見ると、火を使う機器や環境が、とてもいい状態になっていると思います。昔は、火は危険なものであり、例えば、練炭を使っている時においや、火鉢の炭の心細さとかがなくなつてきているのは良いことだと思います。いいデザインのストーブもありますし、防災上の素材がたくさん出揃つてきています。

暖炉を上手く 取り入れた家はまだ少数

積極的に、しかも火だけではなく、火の周りに生じる家環境づくりみたいなものまで含めて、建築に関わる人がもっと積極的に目に見える裸の火をデザインしてくれるといいですね。

今、色々な住宅雑誌でもストーブや暖炉のある住宅の紹介の記事が多く見られますし、ストーブ屋さんの広告もけっこう掲載はされていますが、そのストーブは、燃えている火の写真ばかりです。確かに炎を上げる火の写真は、見るだけでも楽しいものですが、火の周りの環境についても、もっと教えて欲しいと思います。

食べ物などの場合だと、食材はどこから探してくるかとか、食器

はどれがいいとか、包丁はどう使うとか、食べることだけでなく、その周りのことも色々の記事になっているのですから。建築家も、単なる食堂を設計するだけではなくて、キッチン周りのストックヤード、パントリーとか、後始末をどうするかとか、食べることに、料理することに関わる環境そのものを整えるようなデザインをしているはず。ハウスメーカーも台所まわりを組織的に造るようになってきます。何が何でもシステムキッチンというのも困りますが…。しかし、火に関しては、そこまで踏み込んでいませんし、そこを大きく考える人がなかなかいないように思います。

そのあたりを考える上での具体的な例はすぐには思いつけないのですが、最近では、中村好文さんや手塚貴晴・由比さんの手がける住宅は、自分でデザインした暖炉をよく付けています。これからが楽しみです。

「火」を中心にした 住まいを設計したライト

アメリカやヨーロッパに行くと、暖炉はもっと生活に密着した深いものになっているように思えます。

大建築家のフランク・ロイド・ライトなどは、基本的に暖炉を中心にして設計をしています。「住宅のハートは暖炉である」とまで言っているほどです。ですから、暖炉の考え方に気合が入っている。迫力が、存在感が違います。

彼が日本で手がけた住宅では、茅屋にある旧山邑邸や、住宅ではないけれど東京目白の自由学園明日館などの暖炉に中心性が感じられます。ライトは、火をとりあえず住宅の中心に、いつも頭の中で考えながら設計しました。ライトの住宅を見ると、住まいの中心とは、結局どこなのかと考えさせられます。暖炉の位置によって、部屋の真正面になるのが中心ではなく、ちよつとずれてもそこが中

心だ、という感じにさせられます。

こうした例を見ますと、今、我々の時代というのは、火が消えた火が見えなくなった、とにかく熱源だけがあるという、そういう時代であるのと同時に、家の中心を失っている状態です。

よく言われているのは、テレビが入ってきた時に、暖炉があつたところにテレビを置いてしまった。家の聖なる中心がなんとなく便利だとか、気楽に楽しめるテレビに取って代わられてしまった。そこでは火を囲んで家族全員が向かい合うのではなく、情報を発信する一方向に家族みんなが向いていることで、家族がバラバラになってしまった。LDKが、これほど強力に、揺るがないような感じで普及している現在でも、やはり家の中心を失ってしまった。そういうことが言われているわけですが、逆にいえば今の家は中心を喪失しているという前提から、全てを考え直す時代なのかもしれません。

ノスタルジックな、あるいはロマンチックな意味合いでは暖炉が復活



フランク・ロイド・ライトのスタッフとして来日したアントニン・レーモンドが晩年に軽井沢に建てた自邸兼スタジオ。巨大な暖炉が主役。

しているかもしれないが、せんが、建築家が、もっと自由な発想で、もう一度、火を大きく捉えなおす必要もある。火あるいは水というものは、形が決まっているものではない。まして、デザインの手がかりは、まだいくらでもあるんじゃないでしょうか。

火が持っているすごさというのは、一つは生命の代わり、太陽の代わりでもあるからです。本来の意味での熱源を象徴し、同時に滅ぼす、死の象徴でもあるわけです。だから、火を考えていくと、建築に関わるなり、人間に関わるなり、色んな局面で大きな姿を見せるわけです。あまり短絡的に熱源がどうのとか、便利になりすぎてとかを考えるとではなく、住宅と人間の将来的な、大きさに負けない火と結び付く家の姿を探ってみたいと思います。

デザインとしての「火」の難しさ

「火」を積極的に取り入れた住宅と言いましたが、具体的には、どのようなものであるかという兆候はまだ見えていません。電気を使うのは、見えない方がカッコいいといった意味もあるのでしょうか。見



フランク・ロイド・ライト設計の自由学園・明日館の暖炉。椅子と比べるとその威風堂々ぶりがよく分かる。

えないから、むしろデザインしやすい。今の住宅は、みんな白くて、ツルツルしてきれいですから。清潔指向の住宅が多いことの意味を考える必要もあります。

そういった意味では私は、最近の暖炉はかっこよすぎるという感じがします。私の家にある薪ストーブは実用的なもので、格好良くても悪くても関係ないのですが、実際に室内で薪ストーブを使っていると、大変なのは掃除であり、特に煙突は掃除が欠かせません。

火を使うと煤は出るわ、灰は出るわ。温かくなってきたストーブを始末するときは、まずそれらの問題を片付ける必要があります。特に我が家では、そこから発する熱を有効に利用するために、煙突を長く、水平に部屋の中に伸ばしているのです、その分だけ掃除が大変です。しかも昔なら煙突掃除屋さんがいましたが、今は自分でやるしかありませんから。

ただ、例えば、シカゴのモダンデザインのアパートなんかでは、室内は真っ白で暖炉に火だけ燃えている。薪はどこに置いているのだろうと思うと、居間の隅に真っ白な扉があって、その扉を開けると、薪がずらりと並んで積まれている。インテリアの邪魔ということでは、見えないところに、しかもできるだけスイートに収納しているわけですから。ここまでやるのかって感じですけど。そういう風に、考え方によっては、薪の処理だってどうにでもなるわけですから、もっと多様なデザインもできるはずですよ。

いすれにしても、生活にとって火と水は不可欠なものです。だからこそ、やはり一番考えがいがあるというか、デザインしがいがあるのではないかと思います。机などをいくらデザインしたと言っても、形には限りはあるけれども、水や火というものは、これをどうするのか、この周りに生じる色々な問題をどう解決するのかといったことが出てきますから、それを全部デザインしていく必要がある。つまり、どこまでやっても解答がない問題と同じで、それだけ住む人にとってもおもしろい対象です。少し見方を変えると、「火」を出す生活とは何かを、もっと多角的に考えることになるとも言えます。

火の扱いそのものから 変えるのも一手段

先ほど例に挙げました手塚さんの自邸では、建具を開ければ南から北へ、全部吹き放ちになっています。一種のトンネル状になってしまつのですが、その縁側、あるいはテラスとも言うべき、そういう一番抜けているところに小さな薪ストーブを置いてある。壁を背にしているのではなくてね。なかなかおもしろいというか、新しい考え方です。しかもそれで、暖房は充分きいているそうです。

こうした発想ができるのも、日本人が伝統的に色々な形で火を家の中に取り入れてきたという伝統があるからだと思います。日本人ならもっと色々な場所に火を登場させられるはずです。さら

には、一軒の家の中で見る火だけでは終わらず、町や都市計画に繋がっていく可能性もあると思います。しかし、それは建築家だけではできません。

日本では長い間、行事やお祭りなどをつづじて、火の扱いを洗練させてきました。だから、そういう火の力は、テレビ的な日常生活の素材の一つになつてしまつて、弱まる一方になるでしょう。そうなたった時、一

拳に、家の中からも町からも火は消えてしまつような気がします。私の考えですが、裸火を、例えば共同管理ができるようなところにまとめておく。そして、それぞれの家の中には裸火は持ち込まないルールを考える。高齢者住宅などですと、やはり、お年寄りがそれぞれ火を使つたら危ないので、気になつて仕方ないと思いますが、それを共同で管理することで回避する。

これはあまり好ましい例ではありませんが、都市内ではタバコを吸う場所は共同管理されているのですから、火も炊事場のような、調理する、火を扱っているところを限定し、逆にいえばいつでも裸火がある場所を造り、そこに皆が寄ってくるような仕組みです。そうすることで、ブライパシーの領域とパブリックな領域が、もう一度再構成されると思います。

そういった意味でも、火や水は、人々が集まる大きな要因になりうると思います。そこからまた、もっと大きな行事に繋がつていったり、都市環境にも繋がつていったり。

今回の火の特集は難しいテーマですけれど、なかなかのタイミングといえるのではないのでしょうか。読者の方たちが刺激されて、新しい提案を行つてくだされば、この企画は成功だと思っています。

(本稿は植田実氏へのインタビューをもとにCEL編集室がまとめたものです) 写真はいずれも筆者撮影

植田 実(うえだ・まこと)

編集者・住まいの図書館出版局編集長。一九三五年東京生まれ。早稲田大学フランス文学科卒業。六八年に創刊した『都市住宅』(鹿島出版会)の編集長を十六年まで務め、その後A.D.A.EDITA等を経て、八六年よりフリーの編集者に。著書は、『真夜中の家 絵本空間論』(住まいの図書館出版局)、『アパートメント 世界の夢の集合住宅』(平凡社)、『集合住宅物語』(みすず書房)、『編著、ジャパン・ハウス・グラフィック社』など。出版・編集を通して建築文化の普及・啓蒙に貢献した業績により、二〇〇三年日本建築学会文化賞を受賞。



ベトナム・ハノイの旧市街。歩道を臍面もなく占拠して、仕事真最中の鉄工場。ハノイの子どもたちは、この火を見て育つ。働くことを身体で知って生きていく